

## 神田川を表わす新漢字

我が家は神田川のすぐ近く、両岸には桜の木が立ち並ぶ。コロナ禍より前のことだが、毎年両岸の鉄柵には川柳が書かれた短冊が順番にたくさん付けられていた。作者は地域の小中高生が多いが、大学生や社会人のものもあり、内容は豊富でユーモアに富んでいる。中国人の私が特に興味を持ったのは川柳の中の漢語である。五七五の短い詩形に簡潔な漢語が上手に使われていることに驚かされた。神田川が出てくる川柳もあった。五七五のうち五音を「かんだがわ」で使ってしまうのは勿体ないような気がした。そこで新漢字すなわち神田川を一字で表す「澗（音はシン）」を作ってみた。これなら川柳・俳句そして漢詩の中でも場所を取らないであろう。私には川柳や俳句は無理なので七言絶句を作ってみた。2019年6月7日のことである：

訪友帰来日已斜 友を訪ね帰り来れば日すでに斜めなり  
澗辺小店品新茶 澗辺の小店 新茶を品す  
如雲粉色桜花瓣 雲の如き粉色 桜花の瓣（はなびら）  
片片飛揚映晚霞 片片飛揚し晚霞に映ゆ

題は「澗畔賞桜」と決めた。確かに「神田河辺」あるいは「神田河畔」というより「澗辺」「澗畔」のほうが簡潔であり、限られた字数の中で情報を多めに盛り込むことができる。下手な詩だが、ふざけて数人の友人にこの詩を見せた。その後めぐりめぐって、この字のことが早大の漢字博士笹原宏之教授の知るところとなり、その編著『方言漢字事典』（研究社、2023年）水部「澗」（隅田川）の項目の中で教授は次のように言及してくれたのである：「京都の桂川に「澗」（音はケイ・エン）が江戸中期の漢詩人・田中省吾によって、都内の神田川には「澗」（長野県北佐久郡立科町の小字にもこの文字が使われている）が現代の中国人学者である和平氏によって当てられた」（p190）。

「中国人学者」という紹介のしかたに恐縮したことはもちろんであるが、長野県の小字にすでにこの字が使われていたことにも驚かされた。とはいえ神田川にこの字を当てたのは（今のところ）私が初めてのようなので、江戸時代に「澗」の字を作った林述斎、「澗」の字を作った田中省吾と並んで日本の書物の中に名前が残ることになり、大変光栄なことだと喜んでいるところである。

[2024. 5. 1 和平（早稲田大学非常勤講師）]